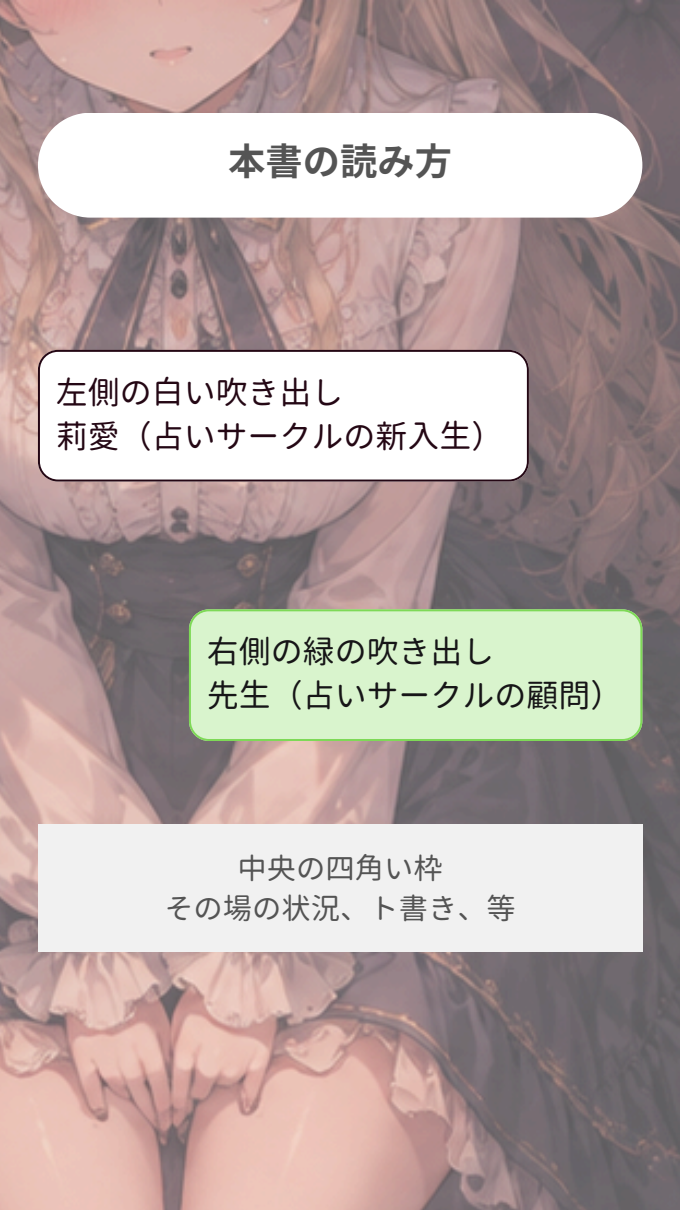

占いサークルの
お嬢さま新入生と
AI調教
フェラ
ごっくん
本番
中出し
部室のソファで
ダウジング棒
(ちんぽ)
を
ずぶずぶする話。
電脳ちょう教会


本書の読み方
左側の白い吹き出し
莉愛（占いサークルの新入生）
右側の緑の吹き出し
先生（占いサークルの顧問）
中央の四角い枠
その場の状況、ト書き、等

私は占いサークルの顧問をしている。
今も昔も、女生徒に占いが人気だ。

うちの学園は、お嬢さまが多いこともあって、部室も立派だし、本格的に取り組んでいる生徒も多い。

普段は優雅なお茶会のような活動なのだが、今日は新入の生徒に呼び出されていた。

どうやら、タロット占いを始めたばかりで、まだ自信がないようなのだ。

「ただ、、、」
「あいつは、タロット占いの前に、お嬢さま過ぎて、世間ズレがな、、、」

部室に入ると、香が焚かれ、蝋燭の明かりで薄暗かった。

女生徒は、高級ソファに座り、ローテーブルにカードを並べていた。

「やあ、もう始めていたのか？」

「先生、いらしてくださったのですね。

まあ、お立ちになられておらず、こちらのソファへどうぞ。

今、最高級のダージリンを淹れさせますわ」

そう言って静かに微笑んだのは、今年入校したばかりの1年生、

白百合院　莉愛
（しらゆりいん　りあ）

だった。

「カードの教えを請いたくお呼び立ていたしましたの。

わたくし、幼少期より星の導きや骨董の美術品には親しんでおりましたけれど……

この78枚のタロットと対話するのは、まだ少し心もとなさを感じておりますのよ」

彼女は真剣な面持ちで、ローテーブルの上に美しく仕立てられたシルクのクロスを広げ、その上に豪奢な金箔押しのタロットカードを丁寧に並べ直した。

「先日、お友達から『アルバイトで失敗したらどうしよう』というご相談を受けましたの。

ですが先生……
わたくし『あるばいと』という概念そのものがよく分かりませんのよ。

労働によって対価を得る……
それは、どのようなカードで表されるべきなのでしょうか？

『悪魔』のカードでしょうか、それとも『塔』のカードでしょうか？」

あまりに世間離れした疑問を大真面目に投げかけながら、彼女は深紅の薔薇が彫られた美しいタロットを1枚、大切そうに手にとった。

「タロットの解釈以前に、わたくし、もっと『世俗の理（ことわり）』というものを学ばねばならない気がいたしますわ。

先生、どうぞご指導よろしくお願いいたしますの」

わたしは莉愛の隣に座ると、高級ソファがゆっくりと沈む。

「なるほど」
「お友達の鑑定をしていたのだな」

「うちの学園は、アルバイトを認めていなかった気がしなくもないが」
「まあ、いいだろう」

「労働の対価を占うのであれば」
「お友達が、何に対価を感じるのかを聞いてあげるといい」

「お金に価値を感じるなら、『皇帝』のカード」

「満足感を得たいなら、『女帝』のカード」

「何かのきっかけが欲しいなら、『運命の輪』のカードがいいだろうな」

「まあ……！
『お金』が『皇帝』で、『満足感』が『女帝』……！

なんと味わい深い解釈でしょう」

莉愛は感銘を受けたように両手を胸の前で合わせ、目を輝かせた。

「わたくし、お金とは『先祖代々の資産を管理するもの』か『お父様におねだりしていただくもの』とばかり思っておりましたけれど……
自らの手で稼ぐお金には、己の領土を治める『皇帝』のような威厳と責任が宿るのですね。
そして、働くことによる満たされた心は、愛と豊かさを育む『女帝』……。
先生のご指南、胸に深く染み渡りましたわ」

彼女は納得したように何度も頷くと、カードの山からそっと一枚を引き、ローテーブルの中央に置いた。

描かれていたのは、輝く黄金の輪が回る『運命の輪』だ。

「そういえば、そのお友達は『新しい自分を見つけたいの』とおっしゃっていましたの。

でしたら、まさにこの『運命の輪』が示すように、アルバイトという経験が彼女の人生の好機となるのかもしれませんわね」

莉愛は少し自信を取り戻した様子で、優雅にカップを手に取った。

「ふふ、世間の皆様がなさる『労働』というもの、少し興味が湧いてまいりましたわ。

……ちなみに先生、その『あるばいと』というのは、わたくしも経験してみることができますの？」

私は「今さっき、うちの学園はアルバイトを認めていないと言ったばかりなのに」と思ったが、莉愛のお嬢さまっぷりに、細かなことは言わないことにした。

莉愛の方に向くと、華奢な身体の膝と太ももが触れた。

「莉愛」
「いったい、どんなアルバイトに興味があるのかな？」

ふわりと漂う薔薇の香りと、触れた膝の柔らかな熱に息を呑みながらも、莉愛は気品ある仕草で小さく首をかしげた。

「そうですね……
わたくし、あの『こんびにえんすすとあ』という場所に強い憧れがございますの」

そう言うと、彼女はタロットカードの『節制』を優雅に指先で撫でた。

「異国から届いた珍しいお菓子や、温かいお弁当と冷たいお飲み物が調和して並ぶ、まさに現代の奇跡のような空間……。

あちらの『れじ』と呼ばれる聖域に立ち、お客様が差し出す小さなお札やコインを丁寧にお受け取りして、『あたたかいものとつめたいものは、お分けいたしますね』と微笑むお仕事……

とても魅力的だとは思いませんこと？」

本気で感動したような眼差しでこちらを見つめてくる莉愛の純粋さに、思わず苦笑してしまう。

「それから、もうひとつ……
『宅配便の配達員様』のお仕事にも惹かれますの。

あの、青と白の清潔なお召し物を着て、大きな街角を颯爽と駆け抜け、人々に幸せの箱を届ける……
まさに現代の騎士（ナイト）ですわ。

『星』のカードのように、人々に希望を運ぶ存在……
わたくしも一度、あの大きなお荷物を背負って街を走ってみたいものです」

あまりにも浮世離れしたアルバイト像に、もし彼女がコンビニのレジに立ったら……と想像するだけで、冷や汗と可笑しさが同時に込み上げてくるのだった。

「そうか」
「莉愛は、仕事に興味があるんだな」

私はジッパーを下ろした。

「では、これで仕事運を占ってみよう」

ジッパーの隙間から、極太のダウジング棒（ちんぽ）をボロリと出した。

莉愛は一瞬、きょとんとした表情でこちらを見つめ、それから優雅に扇子を広げて口元を隠した。

「まあ……先生、それは何かしら？

とても独特な形をした……
骨董のダウジング棒でございますの？」

彼女はまったく動じる様子もなく、むしろ好奇心に満ちた瞳でそれを覗き込んできた。

深窓の令嬢ゆえに、それが何を意味するのか本気で理解していないようだ。

「ダウジングといえば、秘められた脈鉱や水脈……

あるいは、その人の潜在的な可能性を探り当てる古代の占い術ですわね。

まあ、そのような立派で……
骨太な道具をお隠し持っていらっしゃったなんて」

莉愛は少し身を乗り出すと、真剣な面持ちでその「棒」に視線を注ぎ、細い指先で自身の顎を少し考えこむように触れた。

「なるほど……
わたくしの適性や仕事運を、そのダウジング棒の反応で探ろうというわけですね。

わたくし、そのような実践的な占術は初めてですわ。

先生、どのように占うのか、ご指導いただけますでしょうか？」

無知ゆえの純粋で真っ直ぐな瞳をこちらに向けられ、かえってこちらが毒気を抜かれてしまうのだった。

ぶっといダウジング棒（ちんぽ）は、硬さを帯びてドクドクと脈を打っていた。

「占いは、鑑定方法によって、独自の理論体系がある」

「たとえば、タロットカードであれば、カードが運勢を決めるのではなく、カードによって想起されたイメージが運勢を決めていく」

「つまり、自分が何を感じたのかが大切なわけだ」

ダウジング棒（ちんぽ）の先端から、ぷくりとエーテルの雫（先走り汁）が溢れる。

「まずは、ダウジング棒（ちんぽ）をよく観察して、見た目と想起されたイメージを話してみるといい」

「まあ……先生、その棒の先端から溢れ出ている清らかなしずく……

これが噂に聞く、生命の源たる『エーテル』というものですのね？」